

宮信連職の事に、『長谷部信連云々、文治二年の頃關東へ召下されて云々、御恩の始に鎌倉殿御自筆に假名の御下文にて、能登國大屋の莊をば餘の莊と號す。彼所を賜たりけるとかや。』とある。又穴水白山社藏天正八年長連龍の棟札といふものに、國至郡餘庄穴水保とある如きは、前記盛衰記の文に基づいて、餘庄を大屋庄と同義に用ひたものであるが、しかし大屋庄は鳳至郡であり、それを隣郡の名と同一のズを以て呼び換へることがあつたらうとは思はれぬ。

ススシヨウイン 珠珠正院 珠洲郡に在つた。承久三年注進の能登國田數目録に『珠々正院、卅七町、承久元年檢注田定』と見える。後世正院村がある。

スズンシヤ 須須神社 (一)沿革—珠洲郡寺家に在つて、高座宮・金分宮二座に分かれて居る。式内等舊社記に『須々神社。式内一座。三崎郷寺家村鎮座。稱三崎權現。祭神高倉彦神。故稱高倉宮。』又『金分神社。寺家村鎮座。稱金分宮。高倉彦神之后神也。故兩神稱三崎權現也。』と見え、能登名跡志には、『三崎權現は高座・金分の兩社にて、須須彦の神社是なり。北方鎮護の御神、日城四柱の其一社也。高座の御神は、天津彦火瓊杵の命、金分御神は木花開耶姫の命なり。神代より御鎮座、崇神天皇の御草創、社領三崎の郷音は三千貫、其頃は別當高勝寺、神主大宮司狼女氏の外、社僧社人多くありし也。中頃まで十二坊ありて其跡あり。兵亂に中絶あり。其後天正年中利家公諸堂御再興あり。社領田地五町、高に直し七十五石也。内廿五石御社領御修理料に除知あり、廿五石は高勝

寺、廿五石は大宮司狼女氏配分也。』と記する。

(二)高倉彦神—三代實錄清和天皇貞觀十五年八月四日に、能登國從五位下高倉彦神に從五位上を授くとある。この高倉彦神が三崎權現の高倉宮であることに論はないが、それが延喜式の須須神社と同一であるか否かに就いては研究を要する。先づ式内等舊社記はそれを同一と見ること前掲の通りであるが、大日本史神祇志は反對の意見である。即ち高倉彦神社に就いては、『在寺家村高座宮。又稱三崎明神。社記云。本社古在須須嶽。養老二年列官幣。勝寶中移于今地。所謂須須神社是也。是蓋混本社與須須社爲一者。且延喜式不載本社。則養老中列官幣者。或係須須社。而社記援以爲高倉宮之事。恐亦屬附會。要之高座宮之爲本社似無疑。』と記し、又須須神社に就いては、『今在珠洲嶽。稱與鈴明神者蓋是。或云寺家村高座社。其社記云。本社古在須須嶽。勝寶中移于此。爲二柱。男神稱高座宮。女神爲金分宮。此說恐非。且式本社不言二座。則勝寶中分爲二座者亦可疑。故今不取。』と云うてゐる。こゝに與鈴明神といふは、今の狼煙なる須須神社與宮といふもので、大日本史神祇志はこれこそ式の須須神社であるとし、高座宮及び金分宮即ち今の須須神社は、式外の高倉彦神であるとするのである。須須神社與宮の祭神は美穂須須美命で、今の須須神社は瓊杵尊及び木花開耶姫命と言はれてゐる。然るに須須神社誌は更に大日本史神祇志の説を反駁して、高倉彦神は氣多神社以外能登に於いて唯一の神位を有する大社なるが故に、延喜中神

名帳撰進の際漏洩する筈なく、之を高倉彦といふは神名を以て稱し、須須神社といふは地名を以てするもので、共に今の須須神社の高倉宮を指すものに外ならぬと主張してゐる。この説も尤もらしいが、又神名帳の能登の部が、殆ど一國の社號を某比古・某比咩に整理統一してゐる傾向を見るのに、當り高倉比古に限り、逆に須須神社に改めたとも考へられぬやうである。殊に文徳天皇以後延喜以前に神位を進められた加賀の治田若御子神社・山代大環神社・白鳥神社・畔分環神社・垂比咩神社等一として式外ならぬはない例もあるが故に、神位を有する社が必ずしも神名帳に登録せられねばならぬとも論じ難からう。

(三)社僧—須須神社の社僧は天台宗で、高座山高勝寺と呼ばれ、文治中の文書によれば院主傳燈法師の外に結衆十一人があり、又寛正六年二月廿八日の文書にも高勝寺十二房とも記されてゐる。その毎朝・毎月・年中の行事に就いては、同じく寛正文書の『毎年二月常樂會並大師講。三月七日八月九日童聖義、并衆徒一七日法華問答講三十座。卯月七日八日舞童、七月自朔日社頭一七日兒大衆參籠、日夜不退勤行。同本堂一七日兒大衆參籠、日夜不退勤行。八月十四日十五日舞童。四季之八講。長日不退最勝王經仁王般若經法華妙典三部講經等。并每朝轉讀大般若經。并毎月廿八日大日講一品經法華問答講一問一答。』とあつて、社僧が神前の勤行のどんなものであつたかわかる。

(四)國寶—須須神社所藏の國寶に木造男神像五軀がある。高さ四五種五乃至五七種九にして、五軀共に何れも鎌倉時代の製作に係り、

衣冠束帶の坐像である。著色を施した痕跡があるが、今は殆ど全部剝落し、又すべて膝部を缺失してゐる。作風は至つて簡素であるが、面貌は寫實味を帯び、孰れも頭を稍顯明するやうな態度を示す点は、神像として新機軸を出したものであるといはれる。大正十四年四月國寶に指定せられた。

スズンシヤオクミヤ 須々神社與宮 珠洲郡西海郷狼煙山に鎮座する。もと鈴與社とも鈴嶽與神社とも鈴與大明神ともいはれたが、明治十二年以後は須々神社與宮といふことに定められた。大日本史神祇志は之を延喜式の須須神社であるとしてゐる。→スズンシヤ 須須神社(一、高倉彦神)。

ススタケガハ 蝶竹川 →ホウダツガハ 寶達川。

ススナイ 鈴内 珠洲郡飯田郷に屬する部落。

ススナイジヨウ 鈴内城 珠洲郡鈴内にあつた。能登誌に、『此城跡は、今前に馬場杯とて其儘あり。此村に小太郎といふ百姓あり。則城主の筋目なりといへり。』と記する。

ススナイヤマギシ 鈴内山岸 珠洲郡鈴内の小字。

ススノアマ 珠洲の海人 萬葉集十八に、大伴家持の爲に贈京家願眞珠歌に、『珠洲之安麻能、於伎都未可美爾伊和多利互、可都伎等流登伊布、安波妣多麻云々』とある沖つ御神は、與津比咩を祭つてある船倉島のことであらうが、當時珠洲郡に海人が居て渡島したものと見える。

ススノウミ 珠洲の海 萬葉集大伴家持の歌に『珠洲能宇美爾、安佐比良岐之底、許藝